

1) はじめに

私に与えられた課題は、哲学者になるつもりのない学生に対する哲学教育はどうあるべきか、というものである。対象としては差しあたり、二種の学生が想定可能であろう。一つは、文学部などで哲学を専攻とするが卒業後は普通に就職してゆく学生、いま一つは、そもそも哲学を専攻としない学生である。前者は学部専門教育の問題、後者は全学共通の教養教育における哲学教育の問題となろう。このたび意見を述べることを私が期待されているのは前者の問題のようである。そこで、哲学者にならない学生に対する学部専門教育にまつわる問題をいくつか挙げて、本会の会員諸賢とともに考えたい。

なおここで、私の勤務先の状況を簡単に述べておくべきであろう。熊本大学文学部人間科学科（旧哲学科）は、教養部解体にともなう改組により、認知心理学などを加えて97年度から始まった。入試は学科単位で行われ、1学年定員25名（+ ）である。1学年の男女比は1対2程度で、女子学生が多数を占める。学生は3年次より5分野に分かれ、うち3分野が哲学系と言ってよい（倫理学・芸術学・認知情報論）。私が同僚1名と担当しているのは「認知情報論分野」で、ここは主として、心の哲学や認識論、言語哲学を主題としている。言うまでもなく学生数は少なく、今年度は3名が進んだ（うち女子2名）。これまでの卒業生（女子1名）は就職しており、在学生にも研究職志望の者はいない。まさに「哲学者にならない人のための哲学教育」を実践している（？）ものと言えよう。

大学教育にまつわる問題を、大学や学部学科の違いを無視して一般的に論ずるのは難しい。私がここで申し上げる意見は、上のような勤務先の状況を多分に反映したものとなるだろうことを、初めにお断わりさせていただく。

2) 哲学教育の目的と意義

ここで、哲学教育の目的はそもそも何であるか、ということを考えておく必要がある。私が思うに、哲学とは、少なくともその本質においては、出来上がった知識体系ではなく、言ってみれば一つの「思考のスタイル」である。すなわち、さまざまな主題について、特有の仕方で（それがどんな仕方であるのかをコトバで言うのは難しいのだが）、明晰かつ論理的に考える、というスタイルである。そうであるなら、哲学教育の主たる目的は知識の伝達ではありえず、この思考のスタイルあるいは能力を身に付けさせることであるはずだ。そのことは、卒業後は普通に就職する学生に対しても変わらない、否、そのような学生であればなおさらである。というのも、専門の哲学研究者を養成する場合には、それのみでは済まないはずだから。

じっさい、現代日本において、専門家の養成を目的としない哲学教育が社会に対し何か積極的な存在意義を主張しうるとすれば、この点（思考スタイルを習得させること）以外にあるだろうか。哲学という思考のスタイルを身に付けた卒業生は、いまの社会の中にあるさまざまな「通念」を囚われない眼で見直し、ことができるだろう。そうした人間が少しでも多くなることは、日本の社会にとって必ず有益であるはずだ。いずれにせよ、近代化を目指して西洋文明のすべてを必死に学んだ明治期ならともかく、近代化を達成した現代日本において、ソクラテスからデイヴィッドソンに至る西洋哲学の歴史や現状を教えることのみで止まるなら、大学における哲学教育が社会に対してその必要性や存在意義をどれほど主張しうるか、疑問とせざるをえない。むしろ、哲学教育の社会的意義という点については、さまざまな意見がありうるだろう。しかし少なくとも、学生が身につけて社会に出てゆくことを我々哲学教師が望んでいるものは、何よりもまずこの思考のスタイルであるはずだ。（なお、哲学とはほんらい無用のものであり、それゆえ哲学教育の社会的意味を考えることじたい馬鹿げている、という意見もありうる。しかしながら、哲学無用説については措くとしても、もし、日本の大学から哲学教育の場が失われるべきでない、いかなる理由からにせよ考えるのであれば、哲学教育の存在意義を自ら考え社会に向けて訴えてゆかざるをえないことには、同意していただけよう。）

哲学教育の意義は何も社会的なものばかりでない。私の担当する分野に研究者志望の学生は今のところ存在しないとはいえ、哲学者になるつもりのない学生たちもまた、何がし

かの哲学的な問題意識を抱えてやって来る。それは他人の理解という問題であったり、意識や自由といった問題であったりする。(私の印象では、とりわけ女子学生が心についての哲学的問題に興味を示す傾向にあるようだ。)かれらは一人一人漠然とした疑問を抱えているのだが、それにどう答えを見いだすべきか分からずにいる。こうした学生に対して哲学教師が果たすべき役割は、理想を言えば、学生の興味と関心を引き出し広げさせつつ、哲学という思考スタイルを「伝授」することで、学生が自分で問題に取り組み、問いに対する自分なりの答えを出し、その努力を卒業論文という形で結実させる手助けをする、というものであろう。哲学という思考スタイルの教授を通じて、学生が自らの問題に取り組む手伝いをする、これもまた哲学教育の重要な意義であろう。

いずれにせよ、哲学的思考のスタイルを身に付けさせることが、哲学教育の第一の目的であることになる。

こうした考え方に対して、出来上がった学科(discipline)としての哲学の基礎を教えることこそ、学部専門課程における哲学教育の主たる課題である、と主張される方が当然おられよう。むろん、初めから専門研究者の養成が目的であるのなら、そう考えざるをえない。しかし私の勤務先のように、哲学者になるつもりのない学生がほぼ全員である場合(地方大学はどこもそうだろう)このような「学科中心主義」は維持しがたいし、また維持する必要もないのではないか。哲学者にならない学生に対する哲学教育は、専門家養成教育とは別の視点から組み立てるべきである。こうした学生に身につけて卒業してもらいたいものは何かと考えるなら、学科中心主義的な教育を続けるわけにゆかないと思う。(むろん、内容を欠いたスタイルだけの教育というものは不可能であり、学科としての哲学の知識を教えることも当然ながら含まれる。)

3) 授業の方法

では、思考スタイルの習得という目的は、どのように達成されるか。この目的に照らすなら、中心となるのはやはり、もっぱら知識伝達を旨とする講義形式よりもむしろ、文献講読に代表されるような演習形式の授業ということになる。哲学的文章を教師の下で注意深く読んでゆき、教師と学生、あるいは学生どうし、あれこれと議論するのは、哲学的思考の訓練としてたいへん有意義である。(取り上げられる文章は、必ずしも過去の「大哲学者」のものである必要はない。)ここで、現今の大学生が発言にきわめて消極的であることについて考えざるをえない。有効な対策は思い付かない(あれば教えていただきたい)が、発言しやすい雰囲気を作る教師の努力も必要だろう。

また、演習授業において外国語の文献を読むのか、それとも日本語の文献(翻訳も含む)を読むのが問題となる。たしかに、現今の大学生の外国語読解能力は低下しこそすれ高まる気配はない。(近年の「コミュニケーション」能力重視の外国語教育もこの傾向に一役買っているのは間違いない。)しかし私個人の意見を述べるなら、外国語文献による演習はある程度は必要ではないか。たしかに、哲学的に考える能力を養うという目的からすれば、日本語の文献で演習を行なうのみでも十分のように思われる。しかし、外国語の文章を辞書を引きつつ苦労して読む作業は、それじたい思考の訓練としての効果が絶大であるし、これ以上の語学力崩壊を防ぐという(非哲学的な)副次効果もある。日本語の文献を演習で取り上げることに反対ではないし、逆に、過去の「大哲学者」でも欧米の大御所でもない現代日本の哲学者たちの文章がもっと取り上げられてよいと思うが、やはり外国語による演習をある程度は残すべきだと私は考える。むろんこの点は大学や学科ごとの事情に大きく左右されて、一概に言えないことも確かだ。

哲学的思考の訓練として演習形式以上に優れていると思われるのは、欧米の大学に見られるような、教師による一對一の個人指導(チューター制)であろう。これは、もし可能であるなら大いに教育効果が上がるはずである。(すでにある程度は実施されていよう。)しかし、教師の負担は相当なものになりうる(大学によっては、とくに私立大学においては学生数の点から困難かもしれない)。このことは、日本と欧米の大学の組織や制度の面での違いに起因するのかもしれない。そうであるなら、実行するには何らかの制度上の改革が必要ということになる。このような個人指導制は日本の大学でどの程度まで可能か、困難だとすれば何故なのか、考える必要があると思う。

4) 哲学教育における論理学教育の位置

本会会員には大学で論理学の授業を担当されている方が多いと思われるが、哲学者にならない学生に対する哲学教育において、論理学教育はどんな位置を占めるべきなのか、考える必要があると思う。まず、哲学を学ぶすべての学生に論理学教育が必要であるのか。これは私個人の意見であるが、哲学（いわゆる分析哲学に限らず）を学ぶ学生は、専門家にならない学生であっても、少なくとも現代の形式論理学の基礎（一階述語論理のみ、メタ論理を含まない）を学んでおいてほしい。論理というものに、その最も純化された形において触れておくことは、思考のスタイルとしての哲学を学ぶどのような学生にとっても有意義ではないだろうか。そうであるなら、哲学のコースでは形式論理学の基礎を必修科目としておくのが理想であろう。しかし学生の質や学力など、現実にはいろいろと困難があるのは確かだ。（とりわけ、記号アレルギーのある文学部の学生に対して形式論理学を必修とするのは難しいかもしれない。）

さらに、論理学教育が哲学専攻のすべての学生に必要であるとしても、それが上のような従来型の形式論理学（記号論理学）教育のみでよいのか、非形式的な（日常言語に即した）論理の取り扱いを導入すべきではないか、という意見がありえよう。これは、論理学教育の目的をどう考えるかにもよる。論理学を学ぶのは、論理的に思考する能力を養うための一手段であるのか、それとも科学哲学や言語哲学など、より専門的な学習の準備としてであるのか。論理的思考能力の養成のみが論理学教育の目的であるなら、非形式的な論理の扱いを導入することも有意義であろう。しかし、これについては哲学専門教育の一部として行うよりむしろ教養教育としての実施を考慮すべきかもしれない。

さて、学部専門課程の学生に形式論理学を教えるとしよう。このとき、述語論理の完全性や健全性の証明に代表されるメタ論理の教育は必要であろうか。ここで差しあたり、いわゆる分析哲学系の哲学を学ぶ学生とそれ以外の学生とを分けるとしよう。すると後者に関しては、メタ論理は明らかに不要だろう。しかし前者においても、学生の質や学力に応じて考える必要がある。私の勤務先に関して言えば、女子学生が多数を占めており、メタ論理までも必須とするのには些か困難がある。一般的に言って、研究者志望でない学生に対しては、メタ論理についてはせいぜい完全性や健全性といった結果に触れる程度でよく、その証明までは必要ないかもしれない。もちろん、これについても議論があるだろう。

5) 哲学教育における哲学史教育の位置

もう一つ考えたいのは、哲学のコースで必修とされることの多い哲学史の授業についてである。哲学者にならない学生に対する哲学教育において、哲学史はどのような位置づけられるべきであろうか。大学における従来の哲学史の授業は主として、過去の「大哲学者」の思想について講義形式で年代順に網羅的に触れてゆく、という形で行なわれてきた。そこではもっぱら、西洋哲学史あるいは思想史をその展開の内在的な筋道に沿って理解し習得することが目的であった（暗記科目としての哲学史）。これは一つには、日本において哲学教育が始まった明治期における、西欧化・近代化という国家の至上命題が要求するものでもあったろうし、また当時の西洋哲学のなかでの哲学史の位置づけを反映してもいたろう。こうした授業の意義を私は必ずしも否定しないが、当時とかなり状況の異なる現代日本において、同じ方式の授業を繰り返すのみで良いだろうか。そもそも哲学教育の目的を一つの思考スタイルの習得と考えるとき、少なくとも哲学者にならない学生に対しては、こうした知識としての哲学史の教育は、無意義でないとしても中心的重要性を持たないだろう。知識の伝達が哲学教育の主目的ではありえず、これは哲学研究者志望でない学生ならなおさらである。哲学史が必要であるとしても、哲学的思考の能力を養うという目的に役立つかが、ということになる。

そこで思うに、研究者志望でない学生に対する哲学史教育は、網羅的である必要は全くないのではないかと。過去の哲学者たちの思考について講義するとしても、学生の関心に訴えかけるものを選んで提示するというやり方があるのではないかと。より具体的に言えば、学生が関心を抱きそうな一つの主題、例えば心の哲学に絞った哲学史の授業というものがありうるだろう（すでに実践している方もおられよう）。こうした言わば「主題限定型哲学史」によって、過去の「大哲学者」たちが現代日本を生きる学生たちにも無縁の存在ではないということ、かれらの捉えられていた問題が実は学生たちの抱える問題でもあることを示すことが、可能でありまた必要ではないかと思う。このような形の授業が学生の関心を引き起こし、かれらを哲学的思考へ誘う、という効果を期待したい。（また実際問題

として、半年で2単位という授業が増えている以上、網羅的な哲学史の授業は困難になりつつある。)哲学史の授業もこのように、暗記科目でない、学生の関心を引き付けられるものとしなければ、哲学教育したいがギリ貧に追い込まれる恐れがある。とはいえこうした、学生の関心に訴えるような一つの主題に絞った哲学史というやり方を突き詰めると、例えばカントの全く登場しない哲学史の授業というものも、原理的にはありうることになる。それでよいのかも考える必要がある。

以上は、講義形式の哲学史の授業についてである。もちろん、演習形式の授業において過去の哲学者たちの文章にじかに向かい合うことは、その意義を失わないだろう。歴史上の哲学者たちとの対話は、哲学的思考の優れた訓練であるからだ。この意味では、哲学教育における哲学史の意義を全く否定してしまうつもりはない。

とはいえ、哲学史なき哲学教育はありうるか、考えてみるのも悪くないと思う。専門の哲学者を養成するための教育においてはありえないとしても、哲学者にならない人のための哲学教育においてはありうるかもしれない(やはり全面的には不可能としても)。しかしそれが具体的にどのようなものかは明確に述べるができない。例えば、哲学的な問題を教師が提示し、あるいは学生に提示させ、それに対する回答を、教師がある程度リードしつつグループで議論させる、といった形の演習が考えられよう。(これには教師の力量がそれなりに必要とされるだろう。)また、教師どうしが学生の前で模範討議を行う、といった授業も考えられる。いずれにせよ、哲学史ぬきの哲学教育の可能性を探っていくことは無意味ではあるまい。(そのさい、Thomas Nagel の名著 *What Does It All Mean?* が参考になるだろう。)

6) 教養教育

ここまで主として、哲学者になるつもりのない学生に対する学部専門課程の教育について話をしてきた。しかしここで、一般学生を対象とした教養教育における哲学教育について簡単に触れておきたい。忘れてならないのは、こうした授業が、哲学に一度も触れたことのない大部分の学生に対する哲学への最初の誘いであるということだ。一般に、第一印象は重要である。それゆえ教養科目を疎かにしてはならないのであって、担当者の責任は大きい(他人ごとではないのだが)。こうした場面で「新規顧客」を開拓しておかなければ、専門教育も先細りにならざるをえないのである。正直なところ、大都市圏の有力大学ならともかく地方大学において、哲学の専門課程が学生数も少ないままで永久に存在を許されると考えるのは、甘いと言うほかないだろう。

7) 授業技術のことなど

これは自戒の念を込めて言うのだが、いったい教師という人種は、自分の受けた教育を学生に対して再現しがちであるようだ。それゆえ日本のあちこちで、30年前の東京大学での授業が現代の学生たち相手に再現される、という不思議な光景が見られることになる(言いすぎかもしれないが)。言うまでもなく、30年前の東京大学と現在の地方国公立大学や私立大学とでは、学生のあり方(学力やら気質やら社会の中での位置づけやら)がまったく異なっている。当然のことながら、我々教師としては、自分が相手にしている学生のあり方をよく把握した上で、どのような授業がかれらにとって効果的かつ有意義であるのかを考えなくてはならない。(もちろんそれは、学生に媚びよということでは全然ない。授業中に面白い冗談をたくさん言って学生を笑わせよ、などと主張しているのではないのだ。)

哲学教育の第一の目的が思考スタイルの伝授にあるとすると、講義において教師が提示する哲学的議論を学生が理解しなければ、授業はあまり意味のないものとなる。議論の結論だけを学生が暗記したところで仕方がないのである。すると教師は学生に対して、必要なことだけを、能うかぎり明解な仕方提示しなければならない。私も含めて、教師という人種は細部に拘泥したがるものだと思う。しかし、思考スタイルの伝授を主たる目的とするなら、授業においては、伝える知識は本質的なものに絞って、議論の骨組みを明確にすることの方を第一に心がけるべきであろう。

さらに細かい話をすれば、教師には当然プレゼンテーション技術の向上が求められる。例えば、話し方というものはかなり重要である。何をツマラヌコトをと思われるかもしれないが、大きな声で、抑揚を付け、ハッキリした発音で、学生の目を見ながら話すよう心

がけるだけで、学生たちが受ける印象は劇的に変化するものだ。たとえ授業内容が全く同じであっても、このようにプレゼンテーションの仕方を改善することで、学生に対する教育効果は大幅に違ってくるのである。

また、授業技術の共有も考えられる。重要な哲学的議論などについては、標準的教育法を確立し、共有化することが可能かもしれない。

8) おわりに

かつて私が哲学を専攻とする或る女子学生に聞いたところでは、かの女の友人たち（決して学力が低いわけでもなければ、知的好奇心に乏しいわけでもない）の間での哲学のイメージは「ただワケの分からない学問」というものだったという。このコトバに、現在の哲学教育の抱える問題が凝縮されているように思える。

学科中心主義に囚われず、学生の興味や関心に訴えかけ、それを引き出し、学生を哲学という思考スタイルへと誘う授業をしなければ、日本の大学における哲学教育の先行きは暗いのではないか。